

No.5

31 Oct. 2004

日本・パプア・ニューギニア協会会報

ごらくちよう

Bird of Paradise

発行 NPO法人 日本・パプア・ニューギニア協会

発行日 平成16年10月31日

編集 NPO法人 日本・パプア・ニューギニア協会広報部 〒102-0074 東京都千代田区九段南1-6-17 千代田会館6階(ニューギニア航空日本社社内) TEL03-5216-3555 FAX03-5216-3556

# 日本とPNGの若ものたちが育んだ未来への夢

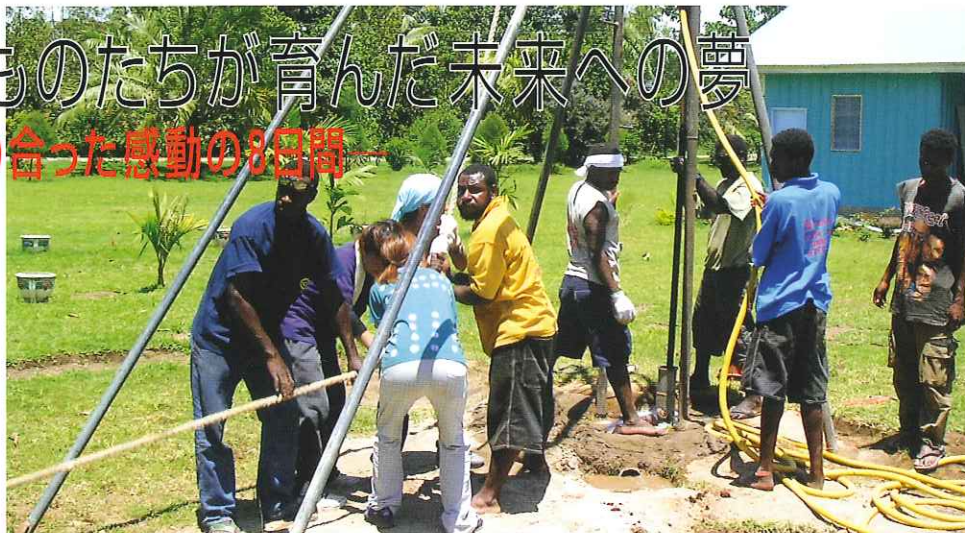
## — 共に汗を流し、語り合った感動の8日間 —

東京国際大学教授 唐沢 敬

“南十字星を見ながら、パプア・ニューギニアの若ものたちと未来を語り合おう!” 学生たちとこんな会話を交わしながら、今年の海外実習サイトをPNGに決定し、準備に入ったのは数カ月前の5月下旬のことであった。プログラムの策定と学生たちへの提示、関係団体・個人への協力要請、事前指導の実施など、その後の活動は実に慌しかった。しかし、このPNG実習プログラム(9月11日～18日)も、20名の学生たちの精力的な働きと当協会はじめ多くの方々の協力に支えられ、夢と感動を残して全日程を終了した。東京国際大学はこれまで教室での講義やゼミ活動と連結した海外プログラムを複数の国で実施してきた。21世紀に相応した新しい価値観と国際的知識、豊かな感性等を備えた有能な働き手を沢山育て、社会に送り出すことを目的としたことであった。今年、私たちが選んだのはPNGとモンゴルであった。

PNGについては、この国の持つ潜在的な可能性、国際的位置、日本との関係(戦争、開発、ODA援助)、実習目標(開発支援と環境保全協力)と強力なパートナー(オイスカ)の存在等が考慮された。

「パプア・ニューギニア：開発と環境」と題した実習プログラムは学生たちの間で反響を呼んだ。1)オイスカ・エコテック・センター(ラバウル)における有機農法支援の研修プログラム、2)戦跡地訪問と戦没者の追悼、3)PNG大学での教授・学生との交流が主な内容であった。エコテック・センターでは、「共に汗を流す」ことを合言葉に、3日間の研修メニューをこなした。豚、ニワトリなど家畜の世話から田植え(陸稲)、井戸掘りに至るまで、学生たちはここで多くのことを学び、汗を流し、PNGの若ものたち



真剣に「井戸掘り」の研修メニューをこなす

と感動を分かち合った。

早朝6時に始まる朝礼と点呼、体操、朝食前労働など全てが初めての経験で、戸惑いもあった。だが、かれらはすぐこれに馴れ、さらに、日本の踊りや組体操などを紹介、また、豚汁、てんぷら、みたらし団子をご馳走して研修生や現地の人々を喜ばせた。教室では見せたことのない情熱や創意工夫を感じさせた場面であった。戦跡地訪問では、日本戦争記念館・戦死者記念碑前で手を合わせ、旧日本軍塹壕跡・兵器の残骸なども数多く見て回った。オーストラリア兵の墓地にも詣った。

日本の若者たちがこうした場所を訪れることで戦争と平和、日本の国際的役割などについて深く考え、将来に役立ててくれることを願ってこのプログラムを企画した。

PNGは長年戦争と植民地支配に苦しみ、今も顕著な社会的・経済的立ち遅れに悩んでいる。

実習に参加した学生たちは、PNGが抱えるこの悩みや苦しみを理解し、この国の若ものたちと一緒に歩んで行きたいと言う。夢と希望を育んだPNGプログラム、来年も是非実施したい。

## パプア・ニューギニアから学んだ国際関係

PNG実習プログラム学生代表団長

東京国際大学国際関係学部4年 佐々木 陽子

8日間で構成される今回のプログラムは実に内容の濃いもので、今までにない新しい刺激を常に感じながらの毎日でした。

まず、初めに私たちはラバウルのオイスカ・エコテック・センターに滞在し、現地の研修生と共に汗を流しながら働き、一人一人が国際協力を体験しました。ここでの生活は実に規則正しく、朝5時半に起床し、国旗掲揚と体操から始まるというスタイルでした。毎日過密スケジュールをこなしていたため、睡眠時間も十分とれませんでしたが、そうした状況を苦とせず乗り越えたのは、なんと言っても研修生たちの笑顔と優しさだったと思います。田植えや井戸掘り、野菜栽培、養鶏、養豚など、センターで行われている有機農法を体験するというプログラムでしたが、研修生たちは、私たち日本の若ものをすぐに受け入れてくれました。

お陰で、充実した時間を共有でき、日本側参加者には大変貴重な経験となりました。センター所長の荏原さんから「学生たちが来てくれたことで研修生が驚くほど元気になりました」との言葉をいただき、大変嬉しく思いました。同時に、3日間の実習を通して、国際協力はこうした形でも実現できるということを実感しましたし、国際協力の重要性を改めて認識させられました。

ラバウル戦跡地訪問では、日本人慰霊碑、山本バンカー、日本軍の潜水艦基地、オーストラリア兵の墓地、そして、戦争博物館等を巡り、ありのままに残った大砲や艦船の残骸を通して戦争の悲惨さを学びました。戦争で失われた沢山の若い命のことを想い、本当に心が痛みました。

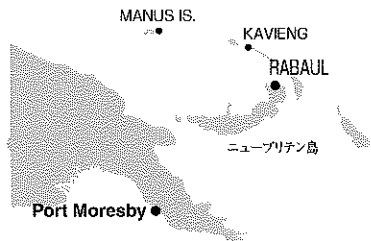
訪問したほとんど全ての戦跡地は立派に整備されていましたが、こうしたことを通じて、PNGの人々が心から平和を望んでいる様子を知ることができました。日本の若ものとして、歴史を深く認識することの重要性を知る非常に良い機会を与えてもらったと思っています。

今回、同世代のPNGの人たちと交流し、国の発展のために奮闘しているかれらの生活や姿に直接触れることができましたが、これは国際関係を学ぶ私たちにとって貴重な体験となりました。授業で学ぶこととは全く違う感動を味わい、一人ひとりが国際関係や途上国問題にさらに強い関心を持つようになったと思います。これまで、さほど強く意識されていなかったPNGを訪問し、その現状を知り、強い刺激を受けました。また、PNGだけでなく、他のたくさんの発展途上国についても視野が広がりました。日本・PNG間の友好関係が更に深められるよう、今回の出会いを活かしていきたいと思っています。



# ラバウル紀行

大牟田 太郎 (日・パ協会個人会員・著述業)



ケビエンからラバウルまで、PNG国内航空で約35分である。空港に着き、はるか北方を見ると、明るい日射しのもと富士型の山に太い噴煙が上がっていた。

あれをかつて「花吹山」と呼んだのだろう。地図にラバウル市街はその西側に記されている。複数の火山が1994年に大爆発を起こし、市街は灰に覆われた。いまだ火山活動は続いているが、幾分か沈静化してきたらしい。

噴火により新空港が建設され、ラバウルから30キロ南のココボ・ビレッジに新しい町が造られた。新空港建設には日本国政府が全面的に寄与した、と賀部さんが教えてくれた。

出迎えはタクラム・ゲストハウスの従業員ジョン・オイメさんである。ニューブリテン島のどこに行きたいのか、とさっそく彼が尋ねた。ラバウルだ、戦跡である、と答えた。それだけでいいのかと、彼は念を押した。もちろん、そのために来たのだから。ジョンさんは快く了解した。

彼はニューギニア本島高地の出身だが、目には哲学的な深みを湛えている。この国の女性は愛嬌のある微笑みを返してくれるが、全般に男はめったなことでは笑わない。男はむやみにニヤニヤするものではない、三年に一度笑えばよろしい、などと私も祖母の妙な薫陶を受けて育ったものだから、イケメンならぬイカツイ面相になってしまった。けれども、調子がいいだけの人間はすぐに見分けてしまうようになった。

2003年5月14日、尾崎記念憲政会館でソマレ首相の来日歓迎レセプションが催され、首相の答礼スピーチのなかで一言「Hakamairi」(墓参り)という日本語が混じり、聴衆のなごやかな笑い声を誘った。私もその頓知に笑ってしまったが、日本人にとって、その笑いはなかなか複雑なのだ。日パ友好のために多くの日本人の訪れを歓迎するとして、観光・保養・レジャーの旅のほか、戦死者の慰霊にも来てほしいというのである。

(Hakamairi)に触発されたわけではないけれど、私がさかんにラバウルのことを言うものだから、今回の旅行は賀部さんがさっさと手配してしまったのである。

賀部さんと今村均大將の事績を話しているうちに、角田房子著『責任—ラバウルの将軍今村均』(1984年、新潮社刊)がなかなか手にはいかない、ということになった。彼は私のようにぐずぐずしていない。すぐさま古本屋で見つけてきた。

昭和21年7月21日、今村将軍がラバウルの戦犯収容所で自決をはかるところからこのノンフィクションは始まるのだが、それまでに32人が処刑されている。それも暴虐の限りを尽くしたというのでは決してない。詳細は図書館でも読んでいただきたいが、敗戦二日後から今村将軍の副官をつとめた薄平八郎大尉が登場する。角田氏は、昭和57年8月、薄元大尉の慰霊団とともに初めてラバウルに取材をすることになる。飛行機を乗り継いで、ラバウルまで22時間もかかっている。

本を読んだ賀部さんが、興奮した声で電話してきた。「薄平八郎さんは私の高校のずっと先輩ですよ。もっとも、彼は旧制中学のほうですがね」と言うのである。太平洋戦争は遠い時代のことになってしまったけれども、ひるがえって考えれば、そんな風に身近に繋がっているのであって、私もその奇縁に驚き、深い感銘を覚えた。

今村均はあちこち移動させられて、一旦は巢鴨に収監されるのだが、自ら進んでマヌス島の獄に収容され(昭和25年3月)、巢鴨に戻されたのは昭和28年8月である。東京の街はもう戦争を忘れたような風俗にあふれ、ジャズが流れ、あるいは「上海帰りのリル」あたりが流行っていたにちがいない。

昭和29年11月15日釈放されて後も、高村光太郎のように自己幽閉を課し、その上で刑死者・戦死者の遺族慰問を続けた。「鐘の鳴る丘」の戦災孤児救済にも大いに貢献した。昭和43年歿。

以前になぜ今村均の名を知ったのかといえば、明治のキリスト教者「熊本バンド」の海老名弾正のことを読んでいたときに、一人の青年の名が記録されていた。海老名は名演説家であった。日露戦争の頃、本郷教会は海老名の演説を聴く青年たちの熱気が満ちあふれ、いつも超満員だったという。説教というような生易しいものではなく、新思想の「演説」だ。その演説に魅了された青年の一人が18歳の今村均である。

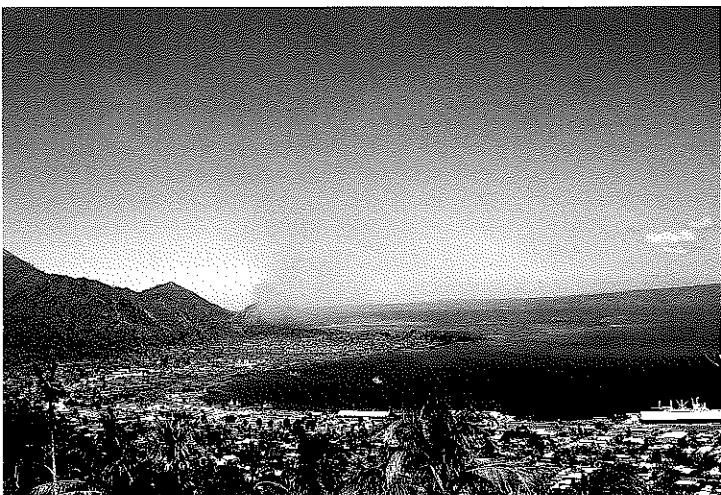
洗礼は受けなかったが、海老名や内村鑑三、山室軍兵などの影響は後年まで消えることなく、「歎異抄」も酌み容れ、清廉の気を生涯保ち続けた稀有な例として、私は記憶に留めていた。人としての立派さは、軍人だの政治家だの、あるいは芸術家だのという目立つ外形だけではなかなか捉えられるものではない。

ポートモレスビーからケビエンに向かうとき、航空機が途中で降りる島がある。「ここが例のマヌス島ですよ」と賀部さんが言った。機内の窓からは草のそよぎが見えるだけで、私たちは降りる予定を組んでいなかった。残念だがそのままケビエンに飛んだのだった。

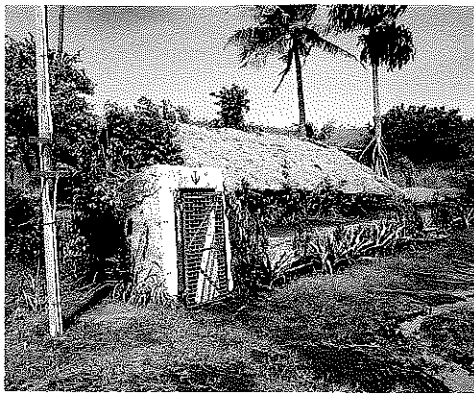
ニューブリテン島では、まずココボ博物館に案内された。庭の芝生に旧日本軍の大砲や何輛かの戦車が置かれている。いずれも錆び止めのため、灰白色のペンキが塗られている。戦車を見ると、こんな玩具のようなもので戦ったのかと、極めて小型なのが意外だった。戦闘機の翼はブリキがめくれている、とても人間や機銃や爆弾を搭載していたとは思えない。

ラバウルに近づくにつれて、火山灰が道路を覆っている。走る車が灰神楽の中に入って行くような具合だ。いたるところで道路工事が行なわれている。

大発洞窟は道路より少し引込んだところにあり、草を掻き分けて歩かなければならない。金網が立てられていて、



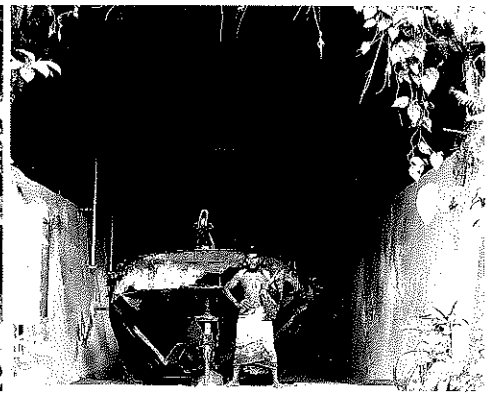
展望台より旧ラバウル市街を望む



山本バンカー



極めて親日的なパプア・ニューギニアの人々



大発洞窟の入口

番の老人が鍵を開けてくれる。めったに訪れる人もいないとみえて、番人はのんびりしている。洞窟の奥は深く、何艘かの船が格納された形で置かれている。隅田川を航行する運送船ぐらいの長さはあると思う。夜の闇に紛れて物資を運び込むための船だったのだろう。

ラバウルがいよいよ近くなってくると、左側の崖に幾つもの防空壕跡が連なっている。右側はシンブソン湾(ラバウル湾)である。

ラバウルの町に入ると、降ってくる火山灰で霞んでいる。それでも青空マーケットが開かれて、人が溢れんばかりだ。しかし、毎日のことであれば、これでは健康によいわけがない。住み慣れた所は離れ難いのであろうか、一時避難していた人たちが戻ってきたものとみえる。ケビエンのアランさんもラバウルに住んでいたが、このダストにたまらず移住したのだと、後日、手紙の返信に書いてきた。

ラバウルにはハママスホテルがある。玄関に火山灰が積もると掃き清めるのと馳ごっこにちがいない。ここの食堂で軽い食事を摂ったが、オーストラリア人だろうか、白人ばかりである。ジョンさんが居心地が悪そうなので、どうしたのかと問えば、こういうところで自分の客と同席したことが雇い主に知れるとまずいのだという。私たちは一緒に食事をするのが当然のことだと思うのだが、どうもそうではないらしい。そういうややこしいことを人間はどうして考えるのか。

ホテルから程近い所に、ヤマモト・バンカーがある。山本五十六元帥の作戦会議室である。コンクリートで固めた地下室は、曲がりくねって奥のほうには水が溜まっている。堅固に造っていても、今どきのJDAM(精密誘導爆弾)とかデジー・カッターというものならば、一発で粉碎してしまうだろう。

山本五十六はすぐ近くの飛行場から飛び立った。昭和18年のことで、ブーゲンビル島上空で撃墜された。「元帥」は追贈である。

ヤマモト・バンカー付近には、機関銃が錆びついたまま放置されていた。旧飛行場は火山の麓に位置し、すっかり灰に覆われている。車はその脇を灰塵を巻き上げて突き進み、シンブソン湾一望の場所まで行った。海からは平らな島に見えるが、火口の太い煙がすぐ目の上にある。そういう所にも人が住んでいる。ジョンさんの妹一家もその一角にいるのだという。火山灰に包まれる生活は悲惨である。灰さえなければ美しい場所には違いないが、何とかならないものかと、旅の者は旅の者なりにそう思わずにはいられない。

帰途、マルマルン展望台(旧海軍防空隊指揮所)に回った。湾を挟んで火山とは反対の小高い丘の上にある。草が生い茂り、偵察台の鉄骨は錆びてぼろぼろになっている。登ると鉄屑ごと転落しそうになる。トーチカは入口までゴミが詰まっていた。脇に据えつけられた機関銃は、銃口も錆びついて潰れている。その周りには百日草のような花が咲いていた。「夏草や兵どもが夢の跡」である。世界中の兵器という兵器が地の塩で錆びついて、花々に囲まれる日はいつのことであろう。

旅行後、芭蕉の句と「ラバウル小唄」を英訳して、ケビエ

ンのアランさんに送った。どんな風に訳したのか憶えていないので、ここには再現できない。

ココボのタクラム・ゲストハウスの経営者は、サイモン・フー氏である。PNG人と中国人の混血で、夫人はオーストラリア人だ。二人とも実に如才ない人柄である。海辺のロッジに泊まったが、手頃な広さであり、清潔で心地よい。テラスの前は浜辺である。海に入ってみたが、火山の影響か、貝も魚影も何もない。潮は澄んでいて泳ぐ分には実に気持ちがいい。泳いでいた子供たちにゴーグルを貸したら、心配になるくらい潜り込んで浮き上がってこない。とてもそんな真似はできないが、少し潜ってみると、投げ込まれたジュース缶やビール瓶が目につく。よろしくない傾向である。

子供たちと潜りっこをしていると、一人の青年がやってきて自分の家に飼っているものがあるという。ドルフィンだの鰐だの豚までいるから見にこいと誘った。変な取り合わせだと思ったが、賀部さんと呼んでその家まで行った。海豚はどこに飼っているのだろうと訝しんでいると、目の前に居るのではないかと指をさす。木の彫り物だったのだ。そそっかしいというよりは、聞き取る訓練ができていないのだ。賀部さんは苦笑いしながら、小さな海豚を買うことになってしまった。

町には青空マーケットも賑わいをみせている。小学校・中学校も多い。車から手を振ると、例のごとくすぐさま喚声とともに反応がある。日本の中古車がたいへん多い。廃車になったらどうするのだろう、と心配になってきた。この国を自動車の捨て場・墓場にしてはならないだろう。

ロッジ前は広い芝生の庭になっており、寝転んで星空を眺めるのにちょうどよい。仰向けになって、ふと思い出した。権藤博さんが野球を教えにきたり、椎名誠氏がソフトボール・チームを連れて親善試合に回っていることをだ。たいへん素晴らしいことである。それならと、私は別の妄想に駆られた。アランさんの敷地もそうだが、タクラム・ロッジ前の庭に櫓を組めば盆踊りができるぞ、と。団地風盆踊りではなく、古典的なものがよい。本来の供養盆踊りである。もちろん唄もライブだ。

「シンシン」の返礼として、常夏の国にたとえば「江州音頭」が流れたり、提燈の明かしのもに念仏踊りなどを練り上げることができたらいいではないか。螢が飛んでくれれば尚いい。唄の口説に合わせる囃子文句なんぞは、この地の人たちならすぐ呑み込んで調子を合わせてくれるにちがいない。踊りの環にも溶け込んでくれるだろう。そんなことを言うものの、自分は素直に唄も踊りもできないタチなので困るのだが。縁日の夜店風星空マーケットが並ぶのもわるくない。

そんな呑気なことを妄想しているのだが、戦死者の魄は魂と成り得ただろうか。つまり、この世に心を残すことを魄というそうだが、野晒しのままの骨がまだあるにちがいない。

高田好胤師が船上で供養をしたときには、海面から糸のような潮が無数に吹き上がり、おびただしい靈魂が火の玉(霊)のように昇っていったと伝えられる。

人間の魂魄とは不思議なものである。それを思う心根こそは、決しておろそかにしてはいけないのではないだろうか。

# パプア・ニューギニア独立記念式典

マイケル・ツマレ首相が9月に来日されるご予定でしたが、急遽、来日が延期となりました。そこで、急ではありましたが、大使館と当協会が主催で、PNG独立記念式典を執り行うはこびとなりました。

平成16年9月16日、東京大手町のパレスホテル2階宴会場にて、総勢、凡そ100名の方々にお集まりいただき、当協会副会長の高松裕満氏の司会でおごそかに式典は始まりました。

まず、マイケル・マウエ駐日パプア・ニューギニア大使よりPNG独立記念をお祝いするお言葉をいただきました。つづいて当協会会長谷口誠が皆様にお集まりいただいた御礼を申し上げ、当協会名誉会長山下徳夫先生に乾杯の音頭をとっていただき歓談へと移行しました。

歓談中は、外務省大洋州課課長三澤康様と当協会理事顧問田中辰夫様より日本とPNGのこれからを考える貴重なスピーチをいただきました。立食ではありましたが、PNGビールと当協会法人会員でいらっしゃいます有限会社ユー・アンド・ユー様ご提供のPNGコーヒーが饗されましたので、PNG気分は十分に味わっていただけたのではないかと思います。

式典は終始なごやかに執り行われ、閉会の挨拶の後、お越しいただいた方全員に大使館よりPNGコーヒーがお土産として配られました。



マウエ駐日大使のご挨拶と当協会 山下名誉会長の乾杯のご発声

## パプア・ニューギニア独立記念式典に参加して 協和海運株式会社 斎藤 優子

快晴の中9月16日パレスホテルにて開催された独立記念式典。

独立29周年記念を祝い、多国籍の老若男女のパプア・ニューギニアに携わっている方々が会場に集まっていた。メイン会場は、皇居のお堀が眺められる景観の良い立地に加え、大きな窓ガラスからは太陽の光が差し込み室内を明るくしており、独立記念を祝う華やかな場だった。式典には私にとり面識のない方が多数おり、少々緊張気味に出席。世間一般ではまだまだ知られていないパプア・ニューギニアも、この式典に参加するといかに多くの人たちが関わっているかを実感できる場でもあった。

その中で、個々人の方が名前を記したシールを貼っていたが、どういう関連の方かわからず声を掛け辛い面があったことは否めず、折角の交流の機会を少し逃してしまい残念であったと私自身感じた。

しかし一方で、普段なかなか接する機会のない方々とも同じ時間を共有できたこと、各々違う関係であるがパプア・ニューギニアという共通点を通じ交流を持つことができたことはとても有意義であったと思う。

式典を通じスピーチをなされた山下名誉会長や谷口会長をはじめとする方々のお話などからも、長年の友好関係に貢献してこられた方々の数とその歴史に驚かされ、日本・パプア・ニューギニア協会の方々をはじめ友好議員連盟の方、PNGと深い関わりの企業や団体等、多くの人々が日本とPNG関係のさらなる発展、向上の支えともなっていることを知った。

またマイケル・マウエ大使がおっしゃっていたように、来年は独立30周年、及び愛知万博も開かれ、パプア・ニューギニアにとますます活気を帯びてくるということで、私自身も今後の両国間の友好関係に少しでも貢献できるよう努めていきたいと感じた。

また、あらたに関わりや協力する方が増えていく中で、より多くの若い世代の人達にも参加してもらえたらと願う。

## 第2回 パプア・ニューギニア独立記念 チャリティー・ゴルフ・トーナメント

パプア・ニューギニア大使館

平成16年9月18日、パプア・ニューギニア大使館、日本・パプア・ニューギニア友好議員連盟、日本・パプア・ニューギニア協会、21世紀クラブ富岡ゴルフコース共催で、第二回目のパプア・ニューギニア独立記念チャリティー・ゴルフ・トーナメントが昨年にひきつづき21世紀クラブ富岡ゴルフコースで開催されました。

午前7時45分よりスタートしました本年度の大会には126名のプレーヤーが参加され、今年度パプア・ニューギニア独立記念杯の栄光は石坂みちお様に輝きました。そして午後4時からのパーティーでは、パプア・ニューギニアの料理、ビール、コーヒーが振舞われ、参加者全員に記念ポロシャツが贈られました。

また、50の競技賞品、パプア・ニューギニアへ



参加者による記念撮影

の往復航空券、国産まつたけ、鰐皮製品等多くの抽選賞品が授与されました。

パーティーで挨拶に立ちましたマイケル・マウエ駐日パプア・ニューギニア大使は、本年度の参加



優勝の石坂様とマウエ大使夫妻

者の皆様に感謝を捧げるとともに、来年度のパプア・ニューギニア独立30周年におけるゴルフ大会にむけ抱負をのべ、より多くの皆様にご参加いただけますよう呼びかけました。

## おめでとうございます!

当協会顧問でいらっしゃいます日本・パプア・ニューギニア友好議員連盟の尾辻秀久先生が厚生労働大臣に、村田吉隆先生が国家公安・防災・有事法制大臣にそれぞれ就任されました。

## こんなサービス始めます!

事務局では、当協会会報誌「ごらくちょう」を1月、4月、7月、10月末に当協会会員全員に送付しております。PNG関連のお知らせ、パンフレットなどでしたら、「ごらくちょう」を送付する際に同封いたしますので、事務局までご一報ください。

## お手伝い募集!

2004年12月1日から25日まで、横浜の西洋館「山手234番館」にて「PNG動物のクリスマス」の展示を行います。

デコレーションの作成(11月)、飾りつけ(11月28日から30日)、後片付け(12月26日から28日)のいずれかをお手伝いして下さる方は、事務局までご一報ください。尚、昨年の世界のクリスマスについてはこちらをご覧ください。

<http://www.city.yokohama.jp/me/green/ygf/yamatasho2003.html>

## 住所変更された方へ

住所変更された方は、必ず事務局までご一報ください。また、左記の日程で「ごらくちょう」が届かない場合もご一報ください。

## 編集後記

現在、せっかく多くの法人の方々协会会员になって下さっているので、どのようにPNGと係わっていらっしゃるのか、また今後はどのように係わっていきたくていらっしゃるのか、など法人の方々のご紹介をこれからしていきたいと思えます。ご協力の程、お願いいたします。(佐藤直子)

## 日本・パプア・ニューギニア協会 会員募集

本協会では随時会員を募集しております。お知り合いの方にぜひお声をかけて下さい。

\*会員数 2004年9月末 法人会員/12 個人会員/70

本協会は、日本とパプア・ニューギニアが友好関係を促進し相互理解を深めることを目的として、文化、学術、芸術、スポーツ、観光等様々な活動を行っております。どうぞ本協会の活動をご理解下さり、ご協力の程をお願い申し上げます。

申し込み方法 / 郵便局の振込取扱票にてお申し込みください。  
年会費 / 個人会員 5,000円 法人会員 50,000円  
会費受付 / 郵便振替口座をご利用ください。

口座記者名先 / 番号 00140-2-277582  
加問入合 / 日本・パプア・ニューギニア協会  
事務局 / 日本・パプア・ニューギニア協会  
〒102-0074  
東京都千代田区九段南1-6-17 千代田会館6階  
(ニューギニア航空 日本支社内)  
電話:03-5216-3555  
E-mail:info@air-niugini.co.jp